

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ
——近代ヨーロッパの黄昏——

上 原 慎 吾*

Joseph Conrad Through Africa
—The Twilight of Modern Europe—

Shingo UEHARA

Born to Polish parents in Russia in 1857, Conrad learned English, as is well known, while serving as a sailor, and his career as a sailor culminated when he took charge of a vessel in the Congo, Africa, which was then governed by King Leopold II. Later, when he looked back on the experiences there, he told one of his friends that he had been just a mere animal before the Congo. It might be easily presumed from this that the experiences had a decisive influence upon his life and thought thereafter. As Jean-Aubry wrote in a letter, "it may be said that Africa killed Conrad the sailor and strengthened Conrad the novelist."

In this thesis I took up three materials: *The Congo Diary* which Conrad kept while in service there, and the two pieces that he later produced out of the experiences. The first one is *An Outpost of Progress* (1897), which focuses on the gradual decay and destruction of two ordinary persons who were transplanted from France to an outpost in deep Africa as if they had been tested in an animal experiment. And the second one is his true masterpiece, *Heart of Darkness* (1899). One of its characteristics is the introduction of a "dramatized narrator" called Marlow, by which Conrad succeeded in making a dismal and horrible story more plausible and receptive of a variety of interpretations. By a detailed "explication de texte" I tried to refute Albert Guerard's view about the causes of Kurtz's disintegration, and saw in his death the decline of the glorious modern Europe that overwhelmed the rest of the world by its ideals of progress, science and civilization. At the same time I interpreted the narrator Marlow as a man deeply imbued with a philosophical skepticism which characterized both the writer Conrad himself and the *fin-de-siècle* mood a hundred years ago.

(I) 『コンゴ日記』

1890年5月12日、コンラッドはフランスの汽船マルセイユ号に乗ってボルドーを後にした。行き先はコンゴ。彼はそこでコンゴ川を行き来する小さな蒸気船の采配をふるうことになっている。

これより先、ベルギーのレオポルド2世は「アフリカ探検開発国際協会」(Association Internationale pour L'Exploration et la Civilisation en Afrique)なるものを設立して、積極的にコンゴ川流域の開発を推し進めていた。無論、この「開発」という言葉が実質的に何を意

味していたかはその後の歴史が立証した通りである。彼は『アフリカ地理学協会』(Conference Geographique Africaine)派遣委員に次のように訓示したと伝えられている。'Le sujet qui nous reunit aujourd'hui est de ceux qui meritent au premier chef d'occuper les amis del'humanite. Ouvrir a la civilisation la seule partie du globe ou elle n'a pas encore penetre, percer les tenebres qui enveloppent des populations entiere, c'est si j'ose le dire, une croisade digne de ce siecle de progres.'「本日ここに我々が会するのは、まず第一に人道を愛する友が専心するに足る目的のためであります。いまだ文明の光が浸透せざる地球上唯一の地域に文明の門戸を開放し、住民を包み込んでいる暗黒を切り開くこ

* 教養課程 講師
平成8年10月31日受付

湘南工科大学紀要 第31巻 第1号

と、これは敢えて言わせていただければ、進歩の時代に相応しい十字軍なのであります。』¹⁾まことに堂々とした演説で、19世紀という進歩の時代の掉尾を飾るに相応しい響きを帯びている。だが、ここに述べられた人道主義、進歩主義の旗印のもとで、資源獲得の帝国主義的野望が確実に触手を伸ばしていたのであって、数年後の1985年には「コンゴ独立国」が誕生し、彼はその国王におさまっている。

コンラッドが伯母のパラドウスカ夫人を介して契約した「奥コンゴ貿易振興会社」も実質的には先の協会の指導下にある国策会社にすぎなかった。彼がどうしてコンゴまで行く気になったのか、今日その理由は必ずしも明らかではないが、後年『個人的記録』(*A Personal Record*)に記述された少年の頃の 아프리카への憧れが、かなりの要因をなしていたであろうことは疑えない。ともかく彼は5月12日にボルドーを発ってアフリカの西海岸を南下し、コンゴ河口のボーマに着く。そこで彼は小さな船に乗り換え40マイル程コンゴ川を溯上して、マタジに到着したのが6月13日のことであった。少年の頃にアフリカの地図を見ていて、漠然と「大人になったらきっとそこに行くことになるだろう」²⁾とひとり呟いたコンラッドであるが、彼がそこで22年後に見聞きたものは何だったのだろうか。どんな体験をしたのだろうか。「コンゴに行くまで私は単なる一個の動物にすぎなかった」('Before the Congo, I was just a mere animal')³⁾とまで彼は友人のガーネットに言っているくらいであるから、それが凡庸な体験であったはずがない。さいわいその当時の彼の日記が残っているので、印象的な記述をさがして以下に訳出してみよう。彼のいわゆる『コンゴ日記』からの抜粋である。

1890年6月13日。マタジ着。

出張所の所長ゴッス氏は何か理由があるらしく私達を引き留めている。…これからのことを思うとひどく不安だ。考えてみれば、ここで彼らとすごす生活が快適であるはずはないのだ。なるべく交際は避けるにこしたことはない。…

6月28日、土曜日。

31人の人足を引き連れて、アルー氏と一緒にマタジを出発。…

7月3日、木曜日。

前の晩に十分休息をとって朝6時に出発。延々とつらなる丘陵を越えて広い溪谷に入る。いや、溪谷というより中程に亀裂のある平原といったところか。ひとりの国土調査員に出会う。2,3分の後、野営地でバコンゴ人の死骸を見た。撃たれたのだろうか。鼻をつく臭い。…あたりは一面に灰黄色(枯れ草)に覆われ、赤茶けた土の部分と暗緑色の植物の茂みがそこそこに散在している。その多くは高く険しい山峡や平原を切り裂く峡谷に生えている。…鳥が魅惑的な声でさえざっている。フルートのような音でさえずるのもいれば、猟犬の遠吠えを想わせるようなものもある。鳩、それから緑色をした2,3羽の鸚鵡が見えた。とても小さくて数も少なく、食用になるような代物ではない。

午前9時前。空は曇っているが穏やかだ。後になって北の方からわずかに風が吹いて、空が晴れた。夜ははじめとして肌寒い。霧が岡の上に半分ほど白く垂れこめている。今朝は水分の加減でとても美しい。普通、空が晴れる前に霧が出るのだ。距離15マイル。方向、北北東-南南西。

7月4日、金曜日。

ひどく不快な一夜を過ごした後で、朝6時に野営地を出立。連綿と続く岡を進んでいったが、いつの間にか迷宮のような所に入り込んでしまい、8時15分にやっと波打つ平原に出る。…もうひとつの死骸が瞑想するような姿勢で道端に転がっているのが見えた。

夕暮れ時に、三人の女が私達の野営地を通していった。そのうちの一人は白子で、ぞっとするほどの白亜色の皮膚に紅い吹き出物、赤い目、紅い髪をしている。顔立ちは生粋のネグロで醜い。蚊。夜になって月が上がるのと、遠くの村々から叫喚とドラムの音が聞こえてきた。寝苦しい一夜を送る。

7月28日、月曜日。

ヘッチと朝食を食べてから6時半に野営地を出発。最初、丘陵沿いの道を取り、次いで両側に溪谷のある岡の尾根にそって歩く。野原が一面にひらけ、山峡には大きくこんもりと茂った木立ちが次第に多くなる。ヌズンギを通り、11時にヌゴマ川の右岸にキャンプを張る。川は小さく急流で、川床は岩になっている。村は右方の岡の上。方向、東北東。距離14マイル。日光なし。陰鬱な寒い一日。スコール。⁴⁾

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

こんな調子で、重苦しく異様な描写が淡々と続くのが『コンゴ日記』の特徴である。日記体の簡潔な記述の中に、ごく無造作に人間の死体が転がっている。異常な情景のはずなのだが、日記の記述から見る限りはその異常さが伝わってこない。人間の死骸はあたかも奇妙な石ころか枯れ木のようにただそこに在る。それはコンラッドにとってはアフリカの風景の一部にすぎないかのようだ。この資料からするとそのように見える。アフリカの原野のこの苦しい旅は、蚊の群れにさいなまれながら36日間にわたって続くことになる。『コンゴ日記』の記述は9月23日をもって終了しているのであるが、彼はこの間さらに仕事でコンゴ川をさかのぼり、ある任務を果たさねばならない。

キンシャサには会社の出張所があって、その所有船フロリダ号がコンラッドの指揮下に入るはずであった。ところが彼が出張所に出向いてみると、その船はひどく破損していて、なまじっかな修理では到底使い物にならないことが判明する。そこで彼は、近々出航することになっていた同じ会社の持ち船ベルギー国王号の員外船員となって、その船に乗り組むことになる。出航の目的は、川の奥地で重病を患っているアントワーヌ・クラインという会社の代理人を救出することであった。このクラインなる人物は、状況からして後に『闇の奥』でクルツとして登場することになるのであるが、実際のクラインがどんな人物であったのか、小説の中のクルツ像がどの程度まで実在の人物クラインの投影であったのか、などに関しては現在では解明する手立てはない。ただ、評伝作者ペインズの調査によると、『闇の奥』の原稿では最初クラインの名が用いられ、後になってクルツに書き換えられたということである。⁵⁾ともあれ、代理人クラインの救出に向かったベルギー王国号であったが、救出して船に乗せるまではよかったのであるが、帰りの航行の途中で彼は小説中のクルツそのままに息を引き取ってしまう。所期の目的は途中で挫折してしまったものの、航行そのものは上天気恵まれて比較的順調にいったようである。一時船長が病に倒れたため、コンラッドが臨時に指揮を執ったりもした。彼ら一行が出発地のキンシャサに帰還したのは9月24日で、往還に約50日を要したことになる。

出張所に帰着して一息つくと、当面彼には何の仕事もない。彼が乗り組むことになっていたフロリダ号はもはや航行不能になっていたし、新たに船長のポストに就け

そうな船は来年の6月まで来そうもないという。折からアフリカの瘴気にあてられて衰弱し、マラリアと赤痢を病んだコンラッドは、すっかり意気阻喪して帰国を決意するにいたる。すでに帰化していた英国へ辿り着いたのは、明くる1891年の1月で、フランスを発ってからほぼ9ヵ月、ここに彼の苦難をきわめたコンゴ体験は終わりを告げたのである。だが、彼の地で得た病は彼の痼疾となって、以後、終生彼を苦しめることになる。断続的に襲ってくる悪寒と痛風がそれである。彼が長年にわたる船員生活に見切りをつけて陸に上がる気になったのも、コンゴ行以後の肉体的な衰えが原因であったとされている。

コンゴ体験が彼に与えた影響は、肉体的なものばかりではなく、精神的にもその後の人生の歩みを変えさせるほどのものであった。アフリカを舞台にして文明や進歩の理想を掲げながら、現実には自己の欲望にのみ導かれたヨーロッパ人の奇怪な姿、その滑稽と悲惨をいやと言うほど脳裏に刻み付けたに違いない。30年以上たってから「地理学と探検家たち」(“Geography and Some Explorers”)と題したエッセイのなかで、彼はこうした白人たちの生態を掃いて捨てるように、「人間の良心と地理上の探索の歴史に泥を塗ったもっとも恥ずべき略奪行為」と断じている。⁶⁾彼のこうした認識は、作家コンラッドの原点をなすものとして創作活動のなかにも跡づけることができるのではないかと思う。小説家としての彼の処女作は『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895)で、彼がコンゴに行く前の年から密かに書き続けられていたのであるが、ジャン・オーブリーにならって次のように言っても差し支えないと思う。すなわち、「船長コルゼニオフスキーを小説家コンラッドにしたのはこのコンゴ体験である」と。⁷⁾コンゴ体験をもとにして生まれた作品が1897年の『文明の前哨所』(*An Outpost of Progress*)であり、99年の『闇の奥』(*Heart of Darkness*)である。通常この2篇はコンゴものとして彼の全作品のなかでも特異な位置を占めている。次いで、それぞれの作品について、物語の進行を扱いながらそのテーマを浮かび上がらせようと思う。

(II) 『文明の前哨所』

この物語には二人のヨーロッパ人が主要人物として登場する。カイエールとカルリエがそれである。主要人物といっても、およそ物語（ロマンス）の主人公らしからぬ貧弱でみすばらしい人物で、かなり戯画化されてい

る。カイエルは17年間故国フランスで電報局に勤め、いたって平凡な市民生活を送っていたが、結婚する娘の持参金を稼ぐために、安定してはいるが収入の少ない職をなげうって、交易会社に代理人として奉職し始めた男。一方のカルリエは、退役してから親戚の家で居候生活を送っていたが、義理の兄弟と衝突し、不本意ながら糊口の資を得るためにおなじく代理人になった人物である。この二人がアフリカの交易所に赴任してしばらくたった所から話は始まる。彼らはアフリカに来るまでは、市民社会の一定の機構のなかで、与えられた仕事を指図通りにしていれば、それで事は済みなんとか暮らしていた。まわりの見慣れた人間の気遣い、上役の指示、軍隊の規律、習慣、法律、そうした日常生活を支えている諸々の支柱に寄りかかっていたら、人並みに幸福で安定した生活を送ることができた。「彼らは二人ともまったくとるに足らぬ無能な男たちで、彼らが生きていくというのも、高度に組織化された文明的な集団社会があったればこそである。」⁸⁾しかし今、そうした市民社会の呪縛から解放されてアフリカの奥地に来てみると、そこにはただ原始の自然、人間、未開の生活があるだけであつた。もともと身を持するに厳しさのほとんどなかった人達が、支えるものとしてない、まったくの未開の地にほうり出されたわけであるから、尋常なことで済みそうもないことは明らかである。彼らはまず自分たちの住まいを快適なものにしようとして、大工道具を持ち出して、あちこちの修理に取りかかる。ところが意外にもこれが難しい。「純粹に物質的な問題でも効果的に処理するには、人が普通考えるよりも一層の心の落ち着き、気高い勇気を必要とするものだ。この二人ほどこうした仕事に不向きな者もいなかったであろう。社会はこれといった親切心からではなく、その奇妙な要求から彼らの面倒を見ていた。独自の考えをもったり、率先して行動を起こしたり、日常の営みと訣別することを禁じ、そしてそれを犯す者には死刑の判決をもって報いるのが社会なのだ。彼らは機械となることによってのみ、生存を保つことができたのである。そして今、耳にペンを挟んだ人々の温かい注意、金レースを袖口に付けた人々の温情ある庇護を離れてみると、彼らは長い獄中生活を経た後で釈放された終身徒刑囚のように、自分たちの自由をどうあつかってよいのか皆目分からなかった。二人とも独自の考えでもって事にあたるという習慣をもたなかったために、自らの能力をどう用いたらよいのか分からなかったのである。」⁹⁾

それでも赴任当初は上役の訓示に刺激され発奮したものであるが、一月经ち、二月经ちするうちに、彼らは次第に離れた故郷をなつかしみ、別れた肉親や友人に無性に会いたくなる。カイエルは長年住み慣れた街のカフェとか役所での噂話など、日常的で些細な事柄に感傷的な愛惜を覚え、カルリエはカルリエで、晴れた午後の空にサーベルや拍車のかち合う音、兵舎で取り交わされる洒落や駐屯地の女達といった軍隊生活を懐かしむ。二人を取り囲む環境が広大で苛酷なアフリカの大自然であるだけに、彼らの郷愁はいっそう募るばかりであつた。

二人はお互い相手のうちに自分の同類を見出して慰めを得ているような人間であるから、二人の仲は決して悪くはなかった。野蛮の地における文明の言わば代表選手として、それなりの自負心を持ち、お互いに協力して心地好い生活を送ろうとしていたのである。ただ、いかんせんこの二人は生来の怠け者で、自分の力で道を切り開こうとする意欲に欠けるうらみがあつた。結局のところ無為のうちにだらだらとその日暮しをする生活に陥ってしまっていた。「二人とも何もしなかった。まったく何もしなかった。そして怠けていてもお金がもらえると思うと嬉しくもあつた。やがて次第に彼らはお互い愛情に似た気持ちを抱くようになった。」(‘Together they did nothing, absolutely nothing, and enjoyed the sense of the idleness for which they were paid. And in time they came to feel something resembling affection for one another.’)¹⁰⁾ こうして彼らの怠惰ではあっても、土地の人達に較べればより「文化的」な生活が、何の支障もなく続くことになる。しかし表面上は十年一日のごとく思われた安易な生活も、その実、当人の知らぬ間にこの二人の凡庸な男たちの内面を蝕み始めていたのである。生命の脈打つ大自然も、これらの文明人にとってはまったく不可解な、関知しえざる「一つの大きな虚無のようなもの」(‘like a great emptiness’)であつたし、その結果として、彼らの理解しえる世界、関わりをもちえる世界は、ひどく限られた範囲に止どまらざるをえなかった。よどんだ一種の閉塞状態に次第に落ち込んでいったのである。「カルリエは目が窪んで怒りっぽくなった。カイエルは太鼓腹のうえに弛み切った顔を乗せて一種異様な相貌を呈していた。しかし彼らはいつも一緒に居たために、お互いの容貌や性質に少しずつ変化が起こっていることに気付かなかつた。」(‘Carlier was hollow-eyed and irritable. Kayerts showed a drawn,

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

flabby face above the rotundity of his stomach, which gave him a weird aspect. But being constantly together, they did not notice the change that took place gradually in their appearance, and also in their dispositions.」¹¹⁾

5ヵ月ほど経ったある朝のこと、近々この交易所に来ることになっている汽船のことを話していると、突然、彼らのところに武器をもった一群の土人たちがやって来る。取引のある顔見知りの土人たちではなく、どこかよその土地から来た一癖ありそうな人たちである。得体の知れない土人を目の前にして、カイエルとカルリエは漠然とした不安を感じ、近づく危険を予感する。「二人は始めて自分たちが、いつもと違うことが危険な状態にいつ変化するかも知れぬ状況のもとで暮らしていること、まわりの世界には、自分たちとその異常なるものとの間に介在するいかなるものも存在しないことに気付いた。」¹²⁾ 実のところ、交易所にやって来た土人たちは遠く沿岸地方から遠征してきた商人で、総勢6人、彼らの手に余る量の象牙をたずさえて取引をしに来たのであった。カイエルとカルリエには、これまで当然のことながら十分な量の象牙を集めることが出来ないでいる。そこにたまたまやって来たのがこの商人たちであった。交易所で補佐役をつとめている黒人のマコーラは、異邦人である彼ら白人と違って、アフリカに生まれ育った人間である。実に悠然とした毎日を送っている有能な所員で、このマコーラが彼らに代わって商人たちとの取引をいってに引き受け、六本の見事な象牙を買い付けることに成功する。彼が代償として商人に与えたのは、交易所に居た10人の黒人人足であった。この取引によって彼らが必要としていた象牙は一応の分量に達するのであるが、その結果、広大な密林によって隔絶されたこの交易所には、二人の白人所員とマコーラ、そしてその家族だけしかいなくなってしまう。彼らと比較的親しくしていたゴビラ村の土人たちも、酒宴の後のいざこざで彼らに敵意を抱くようになる。後でカルリエとマコーラがカヌーに乗って旧交を暖めに行くと、雨あられと弓矢を射掛けられる始末である。彼らと土地の人達との交わりは今やまったく途絶えてしまい、未開の地における文明の前哨所は、不気味に沈黙した大自然に取り囲まれ、まったくの孤壘と化してしまう。そして市民社会の諸々の支柱を失ってしまった文明人の心には、いっそうの空虚が忍び込むことになる。「故郷の思い出、自分たちと同じような人々の記憶、自分たちが考えそして感じたと同じよ

うに考え、感じた人々の記憶、そういったものは遮るものとなない太陽のキラキラした輝きによって、遙かかなたにかすれ去ってしまった。そしてあたりを取り囲む荒野の深い沈黙のなかから、絶望と野蛮が次第に彼らに近づき、彼らをゆっくりと引き寄せ、顔を覗かせ、有無を言わせぬいやらしい親密さで、彼らを抱擁しようとするかに思われた。」¹³⁾

ここまで来れば、後は破局がやって来るのは時間の問題である。彼らが唯一心当てとしていた会社の汽船は、予定の期日を過ぎてもしっこうに到着する気配がない。故国からの音信は8ヵ月も途絶えたままである。食材はほとんど底をつき、今ではわずかに米とコーヒーを残すのみとなってしまった。そして破局は、悲劇と呼ぶには余りに滑稽なことであるが、一杯のコーヒーに入れる角砂糖が原因で起こった。カイエルはかねてから、病気になった時のために瓶に半分ほどのコニャックと15個の角砂糖を大事にしまっておいた。ある日、いつもの米の昼食の後で、カルリエがどうしても砂糖を入れたコーヒーを飲みたいと言い出す。それがもとで、この二人の白人は喧嘩を始めるのである。しばらくドタバタ喜劇そのものの立ち回りを演じたのち、ふと手にした拳銃をもってカイエルは相手のカルリエを射殺してしまう。それは故意の殺人というよりは、むしろ偶発事故に近いものであったが、武器をもたない人間を射殺したという事実には変わりはない。カルリエは右眼を打ち抜かれていた。自分の犯した殺人に茫然自失となったカイエルは、とりとめのない想念にしばしば身をゆだねたのち深い眠りに陥る。明くる朝、目が覚めてみると周囲には重苦しい霧がたれこめていた。彼は起き上がってカルリエの死体を見ると、新たな恐怖に捕らわれたのか両手を上に掲げて「助けてくれ、神様!」と叫び、その場にじっと立ちすくむ。「進歩が川からカイエルに向かって呼びかけていた。進歩と文明とすべての善き市民道徳。社会は今やその立派に成人した子供に戻るよう呼びかけ、これを世話し、教え諭し、判断し、罪を宣告しようとしていた。それは彼に、さまよい出て来たもとのガラクタの堆積に戻るように、そしてそこで判決を受けるようにと呼びかけていた。」¹⁴⁾

コンラッドの作品における「川」のイメージは、次の『闇の奥』でも見るように、河口と源流で両義的な意味になっている。河口においては文明社会であり、源流においては未開の混沌、そしてそれに対応するごとく人間の表層意識と深層意識を合わせもった存在として描かれ

ている。この場合は河口からの呼びかけで、文明社会であり市民道徳であるが、物語のなかではここで現実に「大文明商会」(Great Civilizing Company)の汽船が登場してくる。待ちに待った会社の船がやって来たのである。それは到着の汽笛を霧に包まれた交易所の周辺に響かせるが、皮肉なことに、それが来たのは文明社会では決して許されぬ犯罪が犯されたのちのことであった。交易所のただならぬ気配に不審に思った上司は、土手に上がって用地内を見渡す。彼がそこに見出したものは、墓地の十字架に革紐で首を吊って死んでいるカイエールの姿であった。身体はこわばって気をつけの姿勢をし、片側の頬は紫色になって心持ちふざけるように肩にかしいでいる。そして無礼なことには、自分の会社の支配人に向かって腫れあがった舌を剥き出しにしているのがあった。

ここでこの物語は終わっている。文明の前哨所に配属された凡庸な白人たちは共に滅び、生き残ったのは黒人マコーラとその家族のみである。彼らは二人の白人と違って自然のなかに溶け込み、実に悠然とした日常を送っていた人達だ。アフリカの大地に生を受け育った彼らは、奥地に入り込んでいってもそこで生き抜くすべを心得ている。これと対照的に、カイエールとカルリエは、広大な自然のなかのちっぽけな文明の前哨所に立てこもり、無為のうちに内側から腐敗し、破滅してしまう。いささか図式的で、登場人物が作者の操り人形に過ぎぬような印象を与える欠点はあるものの、状況設定とテーマは非常に魅力的で、最近再評価の声が高いキップリングとはまた違った文明論的な色彩を帯びている。次にこの作品のテーマをなしている文明人の崩壊の過程を分析してみよう。

『文明の前哨所』に限らず、コンラッドの作品には人間の孤独の陰が色濃くにじみ出ているのが特徴である。この陰によって、それぞれの人間はくっきりと隈取りされ、浮き彫りにされている。『闇の奥』や『ロード・ジム』は勿論のこと、処女作である『オールメイヤーの阿房宮』、短編『エイミー・フォスター』(1901年)、それに『勝利』(1914年)、『西洋人の眼の下に』(1911年)など、すべて登場人物は孤独で、他者との間に越えがたい溝をもち、愛情は勿論のこと、お互いに理解し合うことさえ不可能であることがよくある。一例を挙げると、『西洋人の眼の下に』の主人公ラズモフに関しては次のような記述が認められる。「彼は深い海の底を泳いでいる人間と同じくらい、この世にあって孤独であった。」(「He

was as lonely in the world as a man swimming in the deep sea.」¹⁵⁾ 他の作品の主人公にあっても、このラズモフと大同小異である。コンラッドの作品には人間の孤独がまず前提として存在する。このことは作者であるコンラッド自身の信念でもあったようで、ノーブルに宛てた手紙のなかで彼は次のように述べている。「誰でも自分自身の福音の光に導かれて歩む他はない。…どの人間の光も他の人間にとっては善なるものではない。これが私の人生観です。他人の手になるいかなる公式も教義も原則も受け付けません。こうしたものは幻想の産物です。私たち人間は余りにも異なっています。他人にとっての真実は私にとって単に気味の悪い嘘偽りに過ぎません。」¹⁶⁾ こうした信念を人生観の中心に据えていた作家であるから、彼にとっては絶対ということはありません。すべてこれ相対の世界が彼にとっての真実である。彼がヘンリー・ジェームズの影響を受けて小説技法上の相対主義をおのれのものとしたのは、こうした内的必然性があったからに他ならない。そしてまたその延長線上で、文明論的に近代ヨーロッパを相対化するような視点をもつことが可能になったのである。

『文明の前哨所』に話を戻すと、この作品でも人間の孤独が基調として存在することは疑えない。それは次のような表現に現われている。「誰でも自分や仲間たちが発する音声には大変な尊敬を示すものだ。しかし、感情ということになると人間は本当に何も知らない。我々は怒りとか熱狂を込めて話をする。抑圧、冷酷、罪、献身、自己犠牲、美德といったことについて話す。しかし、単なる言葉を越えた真実については何も知らないのだ。」(「Everybody shows a respectful deference to certain sounds that he and his fellows can make. But about feelings people really know nothing. We talk with indignation or enthusiasm; we talk about oppression, cruelty, crime, devotion, selfsacrifice, virtue, and we know nothing real beyond the words.」)¹⁷⁾ ここに示されている人間の理解不能性、孤独、それらはこの物語の主人公を等しく見舞う感情であるのだが、それを痛切に感じるにいたるのは、彼らがアフリカの自然、未開の地に投ぜられたのちのことである。それまでは彼らはフランスの近代社会内における平凡な市民として、日々の仕事、家族の世話、上官によって与えられる単調な労役などに従事し、日常生活に埋没することによって、人間の究極の裸形の姿である孤独という現実と直面せずに済んでいた。高度に組織化された近代社会の内部に棲息する

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

ことによって、我々が直面せずに済むのは、単に孤独ばかりではない。普段は目をそらしがちな諸々の欲望もそうである。人間は様々な欲望を処理する機関として社会的諸制度、流通機構を利用し、またそれによって日常生活が維持できるような仕組みになっている。生存のための闘争とか欲望を充足するための闘争が、社会的諸制度があるおかげでやわらげられ、個人対個人の直接的な衝突が避けられている。こうしたものが存在しなくなれば、社会は一種の修羅場と化し、力の強いものが権力を掌握して欲望をほしきままにするという事態が現出するであろう。そうなる我々が主人公のような人物は立つ瀬がなくなってしまう。この二人にとっては文明社会の制度的支えが生きてゆく上でどうしても必要だった。このような市民社会を、様々な制度的防禦装置の上に成り立つ「仮構の世界」と呼ぶとすれば、一方の未開の世界、原始的自然の世界は「事実の世界」と言える。いっさいの粉飾を出来るだけそぎ落とし、具体的な「もの」のみから成り立つ事実の世界である。市民社会においては、あらゆる事物が人間にとっての利用度と自己保存への配慮によって着色され加工されているが、一方の事実の世界にあっては、ものは端的にそれ自体においてただ存在する。いわば瀟洒なフランス式庭園と人手のほとんど入っていない雑木林の違いと言えよう。仮構の世界にあっては、習慣とか社会の慣例に従っていれば十分生きてゆける。スイッチを入れればどうして電燈がつくのか、蛇口を捻ればどうして水が出るのか、などに関して皆目無知であっても、それで結構日常生活が円滑に営まれているのである。だが、ひとたび仮構の世界から事実の世界に投げ入れられてみると、それまで習慣とか制度によって支えられ、また隠匿されていた人間のあらわな姿が次第に顕在化してくるようになる。カイエールとカルリエの場合もまたそうである。彼らはまず恐ろしいほどの孤独を噛みしめる。「そして今、いくら彼らが環境の微妙な影響に対して鈍感であるとはいえ、突然、未開の地に放り出されてみると、非常な孤独を感じるのであった。」（‘And now, dull as they were to the subtle influences of surroundings, they felt themselves very much alone, when suddenly left unassisted to face the wilderness.’）¹⁸⁾ そしてさらに悪いことには、彼らは生来の怠け者で創造的な能力にまったく欠けている。仮構の世界においては、それでもなんらかの生活の手段があるものであるが、事実の世界においては、じかにものそのものと取り組まなければならない。創意工夫をもって周

囲の自然とか土地の住民にあたらなければならない。かつてマックス・ヴェーバーの眼に映った勃興期の近代を代表する人物ロビンソン・クルーソーとは違って、近代の黄昏の小市民たる彼らにはそうした能力はこれっぽちもない。上役の指示も上官の監視もそこにはない。ただ途方に暮れるだけである。周囲の自然は彼らにとってなんら利用しえるものではないし、慰めを見出せる対象でも戯れる対象でもない。「川、森、生命の脈打つ大地、これらは一つの巨大な空虚のようであった。輝く陽光も何ひとつ理解できるものを示してはくれなかった。色々なものが取り留めもなく、あてもなく彼らの眼前に現われては消えていった。川はどこからともなく、またどこへともなく流れてゆくように思われた。それは空虚のなかを流れていった。」（‘The river, the forest, all the great land throbbing with life, were like a great emptiness. Even the brilliant sunshine disclosed nothing intelligible. Things appeared and disappeared before their eyes in an unconnected and aimless kind of way. The river seemed to come from nowhere and flow nowhither. It flowed through a void.’）¹⁹⁾ 自然は彼ら文明人にとっては巨大で不可解な謎であった。彼らは不可解なものに取り囲まれて、文明の前哨所に立て籠もらざるをえなかった。彼らには川も森も大地も空虚にしか感じられない無意味な存在に過ぎなかったのである。美術史家のヴォリンガーを引き合いに出すまでもなく、混沌として不可解は自然を前にして、人間は恐怖の感情に襲われざるをえない。混沌とした対象に確固とした形象と意味を賦与することによって、原始の人間は恐怖からの脱却を試み、そこにヴォリンガーなどは芸術の起源を見た訳であるが、彼らには創造的才能を必要とするそうした作業は無理である。未開の自然に背を向けて彼らは文明の前哨所に逃避する。それでもやはり恐怖は残る。現地の土人たちとの確執とその後の沈黙が恐怖に拍車をかける。「人間は自分のなかにあるあらゆるものを、愛や憎しみを、信念や、さらには疑念までも滅することができよう。しかし人間は生命に執着する限り、恐怖を取り除くことは出来ない。隠微で、執拗で、恐るべき恐怖、それは人間存在に浸透し、思想を色付け、心のなかに沈潜し、人間が最後の息を吸おうとして苦悶に唇をゆがめるのをじっと見詰めるのだ。」（‘A man may destroy everything within himself, love and hate and belief, and even doubt; but as long as he clings to life he cannot destroy fear: the fear, subtle,

indestructible, and terrible, that pervades his being; that tinges his thoughts; that lurks in his heart; that watches on his lips the struggle of his last breath.)²⁰⁾ 文明社会の道徳は、いつの間にかカイエルとカルリエの二人の許を離れて雲散霧消し、代わりに絶望と破壊的本能が頭をもたげてくる。それはアフリカの原始の自然に触発され、近代社会の仮構によって抑圧され隠匿されていた人間の心の内なる狂気でもある。フランスの社会に留まっていれば、恐らくは小心で平凡な一市民として一生を無事に過ごせたであろうこの二人の人間は、自分以外に頼れるものがない事実の世界に身を投じたばかりに、破滅への道をまっしぐらに突き進むことになる。彼らを自己崩壊に追い遣ったものは、蛮人の敵意でも食糧不足でもなく、本質的には近代人そのもののもつ脆弱さである。事実の世界に直面することによって、文明世界でつちかわれた生活上の狡知や手立ては無効となり、代わりに剥き出しの本能が彼らの心を領するようになる。ひとたびそうした本能に捉えられると、なまじっかな道徳律や信仰では自己を押さえられない。そもそも彼らにとっては、道徳も信仰も社会の桎梏によって支えられていた仮構に過ぎなかったのであろう。

以上、この作品のテーマをなしている主人公カイエルとカルリエの崩壊の過程を辿ってきた訳であるが、このいささか戯画化された悲劇は、単にヨーロッパ近代の凡庸な一市民の死に留まることなく、彼らが凡庸であればあるだけ、それだけいっそう一般の市民との交換可能性が強まることになり、文化的な広がりをも可能性としてもつことにもなる。さらに、作者はここで文明人の憔悴し切った哀れな姿と対照的に、未開地における土着の人間の逞しく精悍な肢体や、マコーラー一家の自然に溶け込んだ嬉々とした生活を描くことで、西洋文明を相対化する視点を取り入れていると言うことが出来よう。未開人の生活が文明人にとっていかに奇異に見えようとも、それは異なった価値体系を持ち、異なった風土に適応した生活様式を維持しているためであって、いちがいに輕蔑したものではないと暗にたしなめているような筆致がうかがえる。ここにはコンラッドに関してよく言われる「反啓蒙主義」(Obscurantism)が見て取れるのであるが、このことも含めて、アフリカに取材したさらに重要な作品である『闇の奥』の分析に進みたいと思う。

(III) 『闇の奥』

この『闇の奥』という作品は、1917年に著者自らが付

した序文によると、現実の体験にほんの少しばかり意匠を施して出来上がった小説であるという。ここに言われている現実の体験とは、言うまでもなく彼のコンゴ体験であるわけだが、実際にこの作品を読んでいると、先に言及した『コンゴ日記』の記述と重複した部分はかなり認められる。例えば、額に弾痕をおって死んでいる黒人のこととか、奥地への遠征に費やした日数のことなど、ほとんどこの作品の道具立ては日記に記された事実と一致している。標準的な伝記であるベインズの『評伝コンラッド』の第四章、コンゴ行を書いている部分を見ても、それは同様である。語り手マーロウの体験は、かなりの部分作者自身のものとして間違いないと思う。ただ、小説の構成上から言うと、この小説を書いたことになるのは「私」であって、この「私」はテムズ川の河口に浮かぶヨット上で、語り手マーロウの話を聞く4人の男の中のひとりである。作者コンラッドの体験は、当然のことながらマーロウの語りのなかに反映しているに違いないが、マーロウを通してそれが語られることによって、「私」と語り手との間に一步距離がおかれ、語りの内容自体が言わば小説のなかで作者とのとも綱を解かれ浮遊することになる。

小説における語りの技法を徹底的に渉猟し分類したウェイン・C・ブースの労作『小説のレトリック』では、このような語り手は“dramatized narrator”²¹⁾とされ、ブルーストの『失われた時を求めて』やトーマス・マンの『ファスト博士』などと一緒の範疇に分類されているが、この技法のもつ思想的意味合いについてはそこでは言及がなされていない。これに対し、比較的早い時期にコンラッドのこの技法に注目し、その積極的な意義を説いたのはサルトルである。『フランソワ・モーリヤック氏と自由』と題した論文のなかで彼は次のように述べている。「小説家はけっして神ではない。いや、ロード・ジムがあるいは《ロマネスクな人物》かもしれないとわれわれに匂わせるために、コンラッドがどんな慎重な態度をとっているか、むしろそれを思い出していただきたい。コンラッドは自分からそう断言することを避けて、自分の創造した人物の一人の口を通じていわせている。間違ふ可能性のある人物にいわせ、しかもこの人物はためらいがちにいうのである。この《ロマネスクな人物》という、実にはっきりした用語は、そのために精彩をおび、悲壮味をもち、なにか神秘的なところをもつことになる。」²²⁾ この部分は勿論『ロード・ジム』を評して彼が言っていることであるが、これはそのまま『闇の奥』の

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

マーロウとクルツの関係にも敷衍して言えることであろう。語り手マーロウにしる「私」にしるクルツにしる、この小説の中ではやはり相対的世界の住人なのである。特権的な視点に身を置いた人物は技法の上から除外されている。つまり我々の世界と同じだ。ところでサルトルはこの論文のなかで、モーリヤックの小説をコンラッドと対比して論じ、作者が全知全能の神としての視点をとって作中人物を動かしているために、人物がすこしも生きていないと批判している。登場人物が作品中でみずからの自由を所有していないというわけである。この批判はさきに論じた作品『文明の前哨所』についてもまったく当てはまることで、さきに「図式的」とか「操り人形」といったのは、こうした事情によるのである。時間的にはわずか2,3年の差であっても、その間にマーロウという語り手を小説中に導入したことによって、コンラッドの作品には格段の奥行きと陰影が加わったと言える。

さて、そのマーロウであるが、この小説の主人公はマーロウであってクルツではない。ましていわんや「私」ではない。ややもするとクルツの悲惨な人間像があまりにも鮮明であるだけに、小説全体に浸透している語り手マーロウの内的葛藤が閑却されがちである。だがそうした見方は木を見て森を見ざるの譬えそのままに、作品全体に対する目配りを欠く。ダグラス・ヒューイットの言葉を借りるならば、「この物語はなにとはともあれコンゴの自然とクルツがマーロウに与えた影響を取り扱っているのである。」²³⁾ マーロウの体験とそれにとまなう心の遍歴がこの物語の主軸を形成している。そしてマーロウの心の内奥への旅路が、実際のコンゴ川上流への溯行とパラレルな関係として設定されている所に、この小説の構成上の妙味があるのである。だが、同じく心の遍歴を取り扱っているといっても、例えばトーマス・マンの『魔の山』におけるように、主人公の内的発展を時間の流れにそって叙述するというのではなく、後からコンゴでの体験を回想する形をとっている。したがって事件を回想しつつ物語るマーロウの言葉は、しばしば途切れがちになり、ある時にはじっと心のうちを凝視するような姿勢をとったり、またある時には体験した事実をどのように解釈したらよいのか分からなくて、深い沈黙に陥ったりする。こうしたマーロウの語り口が不気味な緊迫感をさそって、この小説のなかで彼の語りにリアリティーを与えているのである。マーロウの心の展開をたどる意味で、解釈を交えつつこの物語の筋を見ていくことにしよう。

う。

マーロウが彼のコンゴ体験を語るのは、さきにも述べたように夕暮れ近いテムズ川の河口に錨を下ろした船の上である。聞き手は4人でいずれもかつての船乗り仲間、そのなかに「私」もいる。この冒頭のテムズ川の描写とそれに続くマーロウの語りにいたるまでの叙述はひどく暗鬱で、いかにもこの物語の前奏にふさわしく、時間的にも空間的にも奥行きを感じさせる暗示的表現となっている。著者は、あらかじめ、マーロウにとっての挿話の意味は、果実の核のように内側にあるのではなくてそれを包む外皮にある、月そのものではなくてそれを取り囲む朦朧とした暈にあると述べているが、これは心に留めておく必要がある。一般にコンラッドの小説から人生の究極的な目的とか価値を引き出すことはできない。すくなくとも『ロード・ジム』以前の小説ではせいぜい孤独にたえること、虚無にたえることを教えてくれるにすぎない。これは語り手マーロウの姿にストイックな行者の面影を与えているものでもあって、彼が物語の途中でふともらした言葉、「我々の生も夢と同じだ。孤独なんだよ」(‘We live, as we dream—alone....’)²⁴⁾といった部分にも痛いほどよく現れている。マーロウはまたコンゴでの体験を語りだす前に、「それは航行の極点であったし、また私の経験の頂点でもあった。一種の光を私のすべてに、そして考え方に投げかけたように思われた。」(‘It was the farthest point of navigation and the culminating point of my experience. It seeped somehow to throw a kind of light on everything about me—and into my thoughts.’)²⁵⁾とも述べている。ここからはいかにこの体験が彼のその後の生活に影響を与えたかが伺われる。これだけの前置きをした上で、おもむろにマーロウはそもそものコンゴ行のいきさつから語り始めるのである。

マーロウは東洋の海や太平洋を船員として放浪したあぐく、6年ぶりにロンドンに帰りついた男である。しばらくロンドンでぶらぶらしているうちに、陸上での生活にも飽き、乗り組む船をさがし始める。だが、いざこちらから船をさがすとすると、思いのほか見つからない。そのうちに船さがしも飽きてしまうが、ある日のこと、商店の飾り窓でふと見かけた一枚の地図が機縁となって、忽然とコンゴ行きを決意する。そこには一つの思い出が介在していた。彼は子供の頃から大変な地図マニアで、まだ探索されていない空白の部分指さしては、大人になったらきっとそこに行くのだとつぶやいていたと

いう。その空白には、勿論のこと、赤道直下の地域が多く含まれていた。こうした思い出に触発されて、彼は大蛇のようにとぐろを巻いたコンゴ川をアフリカの地図に見いだした時、あたかも蛇に魅入られた小鳥のように、その魅力のとりこになってしまったという。この部分はさきにも言及したコンラッド自身の少年期の思い出とも正確に照応している。

地図を見てこれだけ大きな河ならばきっと航行している船もあるだろうと推測した彼は、大陸にいる伯母に頼んで貿易会社への就職斡旋をしてもらい、直ちにパリの会社に出かけて行く。このパリでの面接の場面はいかにも暗示的で、行く末に待ち構える地獄の存在を予感させる描写に満ちている。まず、パリという大都会自体、マーロウにとっては白く塗られた墓を連想させるものであったし、案内人のそばで黒い編物をしている女は、「うす気味の悪い不吉な運命を漂わせていた」(‘She seemed uncanny and fateful.’) といった具合である。エヴァンズという批評家は、その黒の色彩は地獄のイメージと密接に結びついていると述べている。²⁶⁾ ところで、会社での面接と身体検査を終えたマーロウは、世話になった伯母にお礼かたがた別れの挨拶に行く。そこで取り交わされる会話は、マーロウという人物を知る上での良い材料となっているから、すこし触れておくことにしよう。伯母はマーロウに向かって「無知な何百万という土人を蛮習から開放すること」(‘weaning those ignorant millions from their horrid ways’) の意義を説くのに対して、彼は、「会社は金儲けのためにやってるんじゃないんですかとほめかして」(‘I ventured to hint that the company was run for profit.’) 無邪気な伯母のはなむけの言葉に応じるのである。この部分からは、若い時からひとりで生きるすべを心得ざるをえなかった苦労人のマーロウが浮かび上がってくる。彼には一見崇高な理想の下にうごめく人間の欲望を見抜くだけの眼力がすでに備わっている。啓蒙主義的な市民道徳をすなおに信じているかに見える善良な伯母の姿は、マーロウのシニシズムと鋭く対比されて、いくぶん滑稽味を帯びているのである。

マーロウはフランスの船に乗っていよいよコンゴに向かうことになる。単調な海岸線に沿って、この船は悠然と南下して行く。船は港という港に停泊しつつ進むのであるが、アフリカ大陸に送り込まれる人間たちは、だいたいにおいて兵隊と収税吏である。収税吏は豊饒なアフリカの物資を調達し、兵隊はその収税吏の身を守るのが

目的であるとマーロウは解釈する。途中で彼が見かけた光景は、沿岸を小舟で漕ぎゆく土人たちの生氣に満ちた躍動と、それと対照的な沈黙したアフリカの大地に向けて6インチ砲を撃ち続けるフランスの軍艦である。土人たちの顔は「奇怪な仮面のようなだが、彼らにしても骨格、筋肉、野性的な生命力を備えているのであって、その力強い活動力は岸に打ち寄せる波のように自然であり、真実でもあった。」(‘They had faces like grotesque masks—these chaps; but they had bones, muscle, a wild vitality, an intense energy of movement, that was as natural and true as the surf along their coast.’)²⁷⁾ それに較べて、フランスの軍艦はいかにもちがちで、なにか途方もなく無意味な行為をしているように思われる。マーロウにとっても「その一連の行為にはいくらか狂気じみたもの、哀れな道化芝居の感があった。」(‘There was a touch of insanity in the proceeding, a sense of lugubrious drollery in the sight;’)²⁸⁾ このへんの描写はじつに見事で、雄大な自然を前にした近代文明の無力、無意味といったことを的確なイメージで伝えている。

さて、目的の出張所に着いたマーロウであるが、彼がそこで見たのは、白人たちの墮落した生活、無意味、無気力、そして木陰で死を待つばかりの黒人労働者の姿であった。彼はまず草原に転がっているボイラーとか、トロッコ、レールなどに着目する。トロッコはひっくり返って片方だけの車輪を空に向かって突き出し、どこか動物の死骸を連想させる。この所の描写は、機械類、無機物を効果的に使って、アフリカに投げ込まれた近代文明の姿を象徴的に表している。次いで彼は黒人たちが目的もなく、ただしきりに穴を掘っている場面を目撃する。「それはただの穴であった。罪人たちに何かすることを与えてやりたいという博愛的な欲求と結びついているのかも知れなかった。」(‘It was just a hole. It might have been connected with the philanthropic desire of giving the criminals something to do.’)²⁹⁾ 何の目的もなく、ただ気を紛らすためにだけしきりに穴を掘る無意味さ。この出張所にはドストエフスキーを想わせるこうした無意味さが充満していることにマーロウは気づく。

15日間の旅をしてようやくたどり着いた中央出張所も同じような状態であった。小屋の一つがある晩火事になったとき、所員のひとは慌ててバケツに水を汲んで現場に駆けつけるが、マーロウがふと見ると、そのバケツには穴があいている。ここにも無意味さがある。荒廃

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

はいたるところに感じられる。出張所の白人たちは何をしているかという、「彼らは陰口をきいたりお互いに陰謀をめぐらしあって馬鹿げた暇つぶしに興じていた。」（‘They beguiled the time by backbiting and intriguing each other in a foolish kind of way.’）³⁰⁾ 出張所の支配人だという男は、3年の任期をただ3回動め上げた頑健なからだの持ち主であるといっただけの理由で、いまの地位を獲得した人物である。所員たちは毎日「象牙」と囁きながら腐食した垣根のなかを歩き回るのみ。こうした所でマーロウは生活するはめになる。さらに悪いことには、彼が船長として乗り組むことになっていた蒸気船は、座礁して船底に大穴をあけ航行不能となっていた。修理には少なくとも3ヵ月は掛かるという。

まったく気のめいることばかりのマーロウであるが、その彼にもひとつだけ興味をかきたてられることがある。それは奥地の出張所で病に倒れているクルツという人物のことである。マーロウは先の出張所でもこの人物についてとかくの噂を耳にしていたのであるが、中央出張所に来てみると彼の噂でもちきりである。たまたま彼はクルツの描いた一枚の油絵を見て異常に引き付けられる。その絵はゆったりとした着物を着て目隠しをされたひとりの女性が、手に一本の松明をささげ持っているところを表わしていた。この絵は、暗黒の野蛮の地に文明の光を灯したいというクルツの理想をそのまま象徴している点で、まことに興味深い。さらにこの女性は目隠しをされているのであるからますます暗示的である。この絵に異様な感銘を受けたマーロウは、そばにいた所員のひとりにクルツとはいったいいかなる人物かと尋ねる。彼はしばらく沈黙してから口をひらくと次のように答えた。「あの人はたいした男ですよ。哀れみと科学と進歩、それからとにかく何というかそういったものの使者なんです。」（‘He is a prodigy . . . He is an emissary of pity, and science, and progress, and devil knows what else.’）³¹⁾ こうした噂を聞いているうちに、マーロウはますますクルツに対する興味をかきたてられるようになる。出張所にいる白人たちが救いようのないほど無気力で怠惰であるだけに、彼のクルツに対する興味と期待はいっそう高まるばかりであった。

もうひとつ彼の心を領するようになったのはアフリカの自然であった。始原の状態を保った自然は次のような仕方で彼を魅了し始めていた。「大陸の沈黙が心にぐっと迫って来た。その神秘、偉大さ、秘められた生命の驚

くべき実在性をともなう。」（‘the silence of the land went home to one’s very heart—its mystery, its greatness, the amazing reality of its concealed life.’）³²⁾ 自然の魅力とクルツに対する興味、これらのみが彼の関心事になったのであるが、取り合えず彼にはなすべき仕事があったひとつだけあった。それは船の修繕である。マーロウが船の修繕に関して述懐する部分は彼の人柄を知る上で重要であるからそこを見ておこう。「仕事は好きじゃない、誰でもそうだが。でも私は仕事のなかにあるものが好きだ。自分自身を発見する機会があるから。ほんとうの自分自身、他人が決して伺い知ることのできない、他人のためではなく、自分だけのための自分。」（‘I don’t like work—no man does—but I like what is in the work,—the chance to find yourself. Your own reality—for yourself, not for others—what no other man can ever know.’）³³⁾ ここに表明されているマーロウの倫理的姿勢、ほんとうの自分、本来の自己を見いだそうとする彼の態度、これこそが先にも述べたようにこの物語のテーマを導く原動力をなして、彼を苛酷な遍歴に駆り立てている当のものなのである。

ともかく彼は3ヵ月目になんとか修理を終えて、重体に陥っているというクルツを救出するため、支配人を含めた「巡礼」の一行とともに、奥地出張所に向かってコンゴ川を溯行することになる。この溯行は文字通り始原への旅であって、鬱蒼と繁った森林、茫洋たる河の流れ、ぎらぎらと照りつける陽光、これらすべてが渾然一体となって自然の狂騒をかなでている。コンラッドの自然描写の常として、ここでも重く強烈な単語が互いに反発と融合を繰り返しながら、生々しい自然の息吹きを伝えているのである。言葉が時に空疎に響くこともないではないが、それでも全体としては言葉の背後に確固とした自然の実在を感じさせる。コンラッドの豊富な自然体験がそうした描写を支えているのであろう。この河の溯行は、中央出張所を出発して2ヵ月目にクルツのいる奥地出張所に到着し終了することになるのであるが、それまでのおもな事件としては、目的地にあと1マイル半と迫ったところで突然現地人の襲撃にあったことのみである。それまではマーロウの巧みな指揮で難所をうまく切り抜け、さしたる困難に出会うこともなく航行は平穩に進む。

だが、マーロウの内的変化に焦点を合せるならば、それほど平穩であったとも言い切れない。それはまわりを取り囲む原始の自然に誘われて、マーロウの心の内にも

原始的な心性があらわになりつつあったからである。コンゴ川の溯行はマーロウの心の奥への旅路でもあった。「我々は先史時代の地球、未知の惑星の面影を留めている地球の放浪者であった。」(‘We were wanderers on a prehistoric earth, on an earth that wore the aspect of an unknown planet.’)「大地はもはやこの世のものとも思われなかった。我々は鎖につながれ飼いならされた獣を見るのにはなれているが、ここでは獣が気ままにうろついているのが見られるのだ。」(‘The earth seemed unearthly. We are accustomed to look upon the shackled form of a conquered monster, but there—there you could look at a thing monstrous and free.’)³⁴⁾ こうした自然に囲まれて河を溯行するうちに、マーロウは次のことに気付いて慄然とする。「土人たちは叫び、跳びはね、旋回し、恐ろしい形相をする。だがぞっとするのは彼らもまた人間だということに思い至った時だ。我々のように。彼らの狂暴な叫び声和我々との間には遠いながらも類縁があると考えた時だ。」(‘They howled and leaped, and spun, and made horrid faces; but what thrilled you was just the thought of their humanity—like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar.’)³⁵⁾ マーロウは自己の内にある狂暴性、どんな桎梏をも破壊しきる原始的心性の存在をはっきりと認めるのである。それは何の制限もなく、ただ発露するままにまかせておいたならば、さきに見たカイエールとカルリエの場合のように、人間を自己破壊に追いやりかねない危険性をもっている。だが、作者はここでマーロウを自己破壊から守るための安全弁を周到に用意している。それはマーロウが自己の内なる原始的心性について語るとき、常に補足的に述べられている。例えば、汽船の燃料にするための薪をさがすという必要不可欠な作業や航行そのものについて、「そうした瑣事、単なる表面的なものごとに気をとられていると、真実、そうだよ、リアリティーというものがかすんでしまうんだ。内側の真実は隠れてしまう、幸運なことにはね。」(‘When we have to attend to things of that sort, to more the incidents of the surface, the reality—the reality, I tell you—fades. The inner truth is hidden—luckily, luckily.’)³⁶⁾ とか、「倒れ木は多いし、水路は浅くてうっかりしていられない。ボイラーには本当のところ不機嫌な悪魔が住んでいるように思われた。こういった訳で火夫も私も自分たちの恐ろしい心のなかなど覗いている暇なんかなかったのだよ。」

(‘But the snags were thick, the water was treacherous and shallow, the boiler seemed indeed to have a sulky devil in it, and thus neither that fireman nor I had any time to peer into our creepy thoughts.’)³⁷⁾ といったふうに語られている箇所がそうである。いずれの場合にも、マーロウが外面的な事物に気を紛らせて、自己の内に鬱勃と目覚めきたった野蛮な心性、彼の言葉を使えば「リアリティー」から目を背けることができたのであった。これがマーロウを自己破壊から救った少なくともひとつの要因であったに違いない。日常の瑣事に気を紛らわせることで、死すべき存在としての自己の姿、悲惨、倦怠などを直視することから救われるというのは、つとに数学者であり哲学者であったパスカルが“divertissement”（訳者により「慰戯」とか「きばらし」と翻訳されている）という概念によって捉えていた人間存在の基本であるが、それがここではそっくりそのまま当てはまると言える。

彼ら一行は奥地出張所に到着する前に、さきにも述べたように、土人たちの執拗な襲撃を受ける。火夫ひとりが槍にさされて死んだとはいえ、マーロウの機転によって彼らはなんとか無事に難局を切り抜ける。危機は去ったのであるが、マーロウにはひとつだけ気掛かりなことがあった。それはこの襲撃によって、彼にとっては唯一の関心の的であったクルツが死んでしまったのではないかという危惧である。彼のクルツに寄せる期待は依然として大きかった。

彼らは奥地出張所のある岸辺に上陸する。支配人は完全武装した「巡礼」たちに守られて事務所の方に向かう。すると入れかわりにひとりのロシア人船員がやってきて、マーロウと会話を交わす。まずマーロウが知らされたのは、クルツが無事であることだが、この道化服を着た奇妙な青年がマーロウに語ったクルツの様子は、彼が期待していた人物像とはかなり違ったものであった。マーロウは意外な事実を知らされる。あの文明の理想を高くかがげて奥地に入っただけのクルツが、今ではまったく象牙の亡者となり近隣の部落を略奪してまわっているというのだ。土人たちに神のごとく崇められ、絶対的な権力をふるっているという。たまたまマーロウが双眼鏡を手にして人家の方を見てみると、そこには数本の杭が打ちつけてあって、その先端に妙なものがくっついている。よく見てみると、それはひからびた土人たちの生首であった。ロシア人の青年が言うには、クルツが見せしめのために反逆者たちを処刑してさらしたものだとい

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

う。思わずマーロウは笑ってしまう。今まで彼が見てきたのは敵や罪人や労働者としての黒人たちであった。今度はこれに反逆者が加わったわけである。彼は白人たちの尊大な振る舞いと、彼らの意志ひとつに翻弄されている土人たちの哀れな姿に、怒りも哀れみも通り越してただ笑うだけであった。マーロウのクルツに対する期待はものの見事に裏切られていた。ロシア人の青年がさらに言うには、先の襲撃もクルツが仕組んだものだという。彼はすっかり象牙の魅力と権力欲にとりつかれてしまい、身体が病み衰えた今となっても、絶対的な権勢を誇るこの地を離れたくないという。

そのクルツがいよいよ担架に乗って船の方に運ばれてくる。するとおびただしい数の土人たちが手に手に武器をもってクルツを取り囲む。クルツは彼らにとっていまや恐るべき神である。彼が大声で叫ぶように何事かを告げると、群れをなしていた土人たちがさっとどこかに消えてしまう。この時の場景はマーロウの目に次のように映った。「彼の肋骨は鳥籠のように波打ち、腕の骨はうちふるえていた。あたかも象牙で出来た死神が動きだし、黒く光るブロンズ製の不動の群衆に向かって腕を振り振り威嚇しているようであった。」(‘I could see the cage of his ribs all astir, the bones of his arm waving. It was as though an animated image of death carved out of old ivory had been shaking its hand with menaces at a motionless crowd of men made of dark and glittering bronze.’)³⁸⁾ 物欲と狂暴な習性に凝り固まってしまったクルツの姿は、いまやマーロウの目には妄執を留めた死者のイメージでしかなかった。クルツは「巡礼」たちに守られて船の一室に収容される。傍目には死を待つばかりの身でありながら、その夜遅く、クルツは船からの脱出を試みるが、自力で歩ける訳はなく、なんなくマーロウに連れ戻されてしまう。

明くる日の正午頃、船は瀕死のクルツと彼が集めた大量の象牙を乗せて、奥地出張所を後にする。コンゴ川の下りは、さきの溯行が始原への旅であるならば、文明への、日常生活への帰還である。未開の地にあって、骨の髄まで野蛮と狂暴な本能におかされてしまったクルツは、いまや闇の奥から文明の明るい世界へと無理やり引き出されようとしている。この後におよんでも、文明の使者をなかば誇大妄想狂的に自認しているかに見えるクルツであるが、その彼の超人的な生への意志を支えていたのは、実際には象牙に象徴される物欲と権力欲とであった。これらの欲望の充足の地から離れるにつれて、

彼の生命力は刻一刻と失われてゆく。衰弱がはげしいために、クルツは風通しのよい操舵室に入れられることになる。このためマーロウは彼の身の回りの世話をするはめになり、最後のいくばくかの時を共に過ごし、生前の彼を最後に見た人間となる運命になる。この間、彼は幻覚におちいったかに見えるクルツの胸の底から絞り出される言葉を聞く。だがその言葉はかつての崇高な理想とかけ離れて、もっぱら我欲に取りつかれた男の富と名誉を夢想したうわごとでしかなかった。広大な自然のもつ力をひしひしと感じていたマーロウは、それを聞いて、周囲の自然がいまにも笑い出すのではないかと思ったくらいである。機械の故障で航行不能になってしまったある晩のこと、マーロウが灯りをもってクルツの所に行くと、クルツはまんじりともしないで、このまっくら闇のなかで死が訪れるのを待っているのだと言う。マーロウが手にしている灯りがまったく見えなくて、すでに失明しているのがわかる。かつて彼が描いた絵そのままに、暗黒の地に文明の松明を灯そうとした彼の目に、いま目隠しが掛けられたのである。クルツは最後に息も絶え絶えに2度ほど叫ぶ。「地獄だ! 地獄だ!」(‘The horror! The horror!’)と。マーロウは無言のうちに灯りを消して船室を出る。するとそのすこし後で、支配人付きの黒人ボーイが食堂にやってきて一同に告げる。「クルツさんが、死んじまっただ。」(‘Mistah Kurtz—he dead.’) 食堂にいた人たちはすぐに船室に駆けつけるが、マーロウはひとり残って食事を続けようとする。当然、食事はのどを通らないが、彼は食堂から出ようとはしない。食堂には少なくともランプの灯りがあり、外は漆黒の闇が荒野を包んでいたからだ、と彼は言う。

こうして運命の巡り合わせでクルツの死をもっとも近くで体験したマーロウは、彼自身病に倒れ、朦朧とした頭のなかで、クルツという人物についてあれこれ考える。「懐疑」(“scepticism”)につねにとらわれて、そこから一歩も踏み出せないでいる自分に引きくらべ、クルツはやはりある意味で偉大であったと彼は思う。当初の期待は裏切られたけれども、すくなくとも彼なりの信念をもち、行動し、そして最後に「地獄だ!」という言葉で人生を要約した男に、彼は一種の憧れをいだくのである。

マーロウは闇の奥からなんとか生命をとりとめて、文明の世界に帰還する。再び、墓場のような都会、パリに行く。ひとたび人間の内奥の恐怖と死という人間の宿命に直面した彼にとっては、都会の街をいそがしそうに右往左往している人たちが、奇妙に迂遠に見えてくる。そ

れは彼のアフリカでの体験がもたらした新しい視点によるのだろう。極限状況を体験した人間が、日常生活をおくる一般の人々に対して感ずる癒しがたい違和感、そして少々の侮蔑によって引き起こされる疎外感が彼の心にはあったのだろう。「彼らの生活態度は、安全を信じきって商売に奔走している平凡な男のそれと変わりなく、目先の危険に気付かず尊大ぶって愚行を演じている人間のように、不愉快に感じられた。私には彼らを啓蒙しようなどという気は起こらなかったけれども、愚かしく真面目くさった彼らの顔つきを見てると、こみ上げてくる笑いを押さえるのにひと苦労だった。」(Their bearing, which was simply the bearing of commonplace individuals going about their business in the assurance of perfect safety, was offensive to me like the outrageous flauntings of folly in the face of a danger it is unable to comprehend. I had no particular desire to enlighten them, but I had some difficulty in restraining myself from laughing in their faces so full of stupid importance.)³⁹⁾ ここにマーロウの手前勝手な倨傲をみるか、あるいは実存者の孤独な苦しみを感じ取るかは、読者の自由である。いずれにしても、この時に感じた市民社会に対する違和感は、以後、彼に付きまとうことになる。ここには言うまでもなく、さきの『文明の前哨所』で見た市民社会の仮構性に関する作者の考察が反映しているのであろう。

マーロウがコンゴから帰って1年以上もたったある日、彼はそれまで身体の具合や精神的苦痛のために静養していたのであるが、過去の思い出と決別するために、クルツから託された書類を彼のフィアンセのもとに届けようと思い立ち、彼女を訪ねて行く。彼女との会見は、彼の苦難に充ちた体験に一種のとどめを刺すことになるのであるが、そうとも知らずに彼はなかば好奇心にかられて出かけて行くのである。

実際に彼女に会ってみると、クルツの訃報に接してからすでに1年以上もたっているというのに、彼女はまだ喪服に身をつつんで永久に嘆いているように見える。彼女は家人の反対を押し切ってクルツと婚約したということで、一生彼の思い出のなかに生きようとしているかのようであった。マーロウと彼女との間には、共通の話題、つまりクルツをめぐるさまざまな会話が交わされる。彼女の追憶にあるクルツの姿は、あくまでも理想に燃えた高潔な人物としてのそれである。一方、マーロウの心には、言うまでもなく荒野の野蛮と象牙の魅力にとりつ

かれて死んでいったクルツの悲惨な姿が焼き付いている。ひとしきり彼女はクルツの高邁な人柄について話した後、是非ともこれから生きていくためのなにか支えが欲しいと言って、クルツのいまわのきわの言葉を教えてくれと願う。一瞬、マーロウの脳裏をかすめ去ったのは、勿論あの「地獄だ! 地獄だ!」といった悪夢のような言葉であった。しかし、彼は気を取り直すと、ゆっくりと、それはあなたのお名前でしたよ、お嬢さん、と言って口を閉じる。するとクルツの許婚者は、「わたしには分かっていたいまわ、わたし疑いませんでしたの」(I knew it—I was sure!)と言って、その場に泣きくずれる。マーロウには本当のことが言えなかったのである。彼は「暗黒の世界にあってこの世ならぬひかりを放っているこの偉大な救いの幻影」(that great and saving illusion that shone with an unearthly glow in the darkness)に彼女をそっと眠らせて、彼女のもとを立ち去る。「私にはとても言えなかった。それは余りにも暗い、まったく余りにも暗すぎるように思えたのだ…」(I could not tell her. It would have been too dark—too dark altogether....)⁴⁰⁾ これがマーロウが最後に語った言葉である。ここで彼の物語は終わる。

以上、マーロウの心の遍歴を跡付けつつ、この物語の筋をたどってきた。小説の最後場面は再びテムズ川の河口に移り、河と海と空が溶け合い暮れなずんで行くという、時間と空間の広がりを感じさせる描写で締めくくられる。「マーロウは語り終えた。そして彼は離れたところで沈黙し、瞑想する仏像のような格好で茫然と坐った。…沖合いは暗雲におおわれ見えなかった。世界のさいはてまで続くこの静かな河の流れは空一面の雲のもと黒々と流れていたが、それは巨大な闇の奥へまでもそそいでいるように思われた。」(Marlow ceased and sat apart, indistinct and silent, in the pose of a meditating Buddha....The offing was barred by a black bank of clouds, and the tranquil waterway leading to the uttermost ends of the earth flowed sombre under an overcast sky—seemed to lead into the heart of an immense darkness.)⁴¹⁾ 小説の出だしの部分と同様に、世界が闇に包まれつつあるかのような暗澹とした情景を読者に印象づけ、小説の円環構造を完結するかのようにして終わっている。この暗い河は、マーロウとマーロウの話を聞いた4人の海の男たちの心のなかをあらわすと同時に、時空を越えてあいも変わらず存在する人間の心のなかの闇を象徴しているのであろう。クル

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

ツのように、かつてテムズ川から文明の松明をかがけて世界の海に乗り出し、征服した人々、それとは逆に、さらに昔、テムズ川をさかのぼって未開のブリテン島に侵入してきた当時の先進的なローマ人たち。彼らはいずれも基本的には物欲に導かれつつも、結果的には文明の伝播者としての役割を多かれ少なかれになうことになったクルツの先駆者たちである。栄光と汚辱の両義的な歴史を残した彼らの行為をあがなうものは、マーロウによれば「観念」であるという。「この地上の征服とは、我々と違った顔付きをしていたり、ちょっとばかり低い鼻をしていたりする人たちから勝利をもぎ取することを意味しているのであって、よく見れば卑劣だ。それをあがなってくれるものは観念のみだ。征服の背後にある観念、感傷的な見栄などではなく観念なのだ。おそれを捨てて信じ込み、我々がつくり上げ、その前に拝跪し、またそのために犠牲をささげる観念なのだ…」(“The conquest of the earth, which mostly means the taking it away from those who have a different complexion or slightly flatter noses than ourselves, is not a pretty thing when you look into it too much. What redeems it is the idea only. An idea at the back of it; not a sentimental pretence but an idea; and an unselfish belief in the idea—something you can set up, and bow down before, and offer a sacrifice to . . .”)⁴²⁾ この部分が小説『闇の奥』のもっとも重要なメッセージを含んだ箇所だと思うが、この認識は、マーロウが崩壊寸前のクルツと運命的に出会い、自分自身の肉体および精神の危機をへて獲得するにいたった人間への洞察である。ドストエフスキーの世界におけるように、観念が人間の行動を支配し、やがてはその人間を喰い尽くすにいたるさまを、クルツの崩壊を通してマーロウは語っている。すくなくとも小説の構成上はそうになっている。さらにこの構成といった観点から言えば、クルツにおける「観念」(“idea”)は、彼の許婚者における「幻影」(“illusion”)に等しい役割を演じているということになるだろう。結果的に片やクルツを死に導き、もう一方は許婚者の生を支えるといった具合に、その働きの方向は逆ではあるけれども。

(IV) クルツの崩壊

『闇の奥』では、マーロウのコンゴでの体験と、その前後の心の軌跡に重きが置かれていることはすでに述べた。代表的なところでは、ゲラードの解釈、ヒューイッ

トの解釈、ティンダルの解釈、いずれもこのマーロウに焦点を当てている。だが、それにもかかわらず、あのクルツという人物、やや観念的に描かれているが、その与える印象は余りにも強烈である。彼に較べれば、傍観者の色彩が強いマーロウの方はやや影が薄い。もっとも、そのクルツといえども、我々が知りえるのはあくまでマーロウの見聞、解釈を通じてのみなのであるが。ここではこのマーロウの見聞、解釈によるクルツ像、およびその崩壊の過程をたどり、あわせて彼の死が意味するところのものを述べることにしよう。

奥地出張所に赴任する前のクルツについて、我々が知りえるのはごくわずかな事実のみである。詩を書いているとか、元来すぐれた音楽的資質の持ち主であったとか、はては万能の天才であったという風評がマーロウのもとにもたらされている。だが、そうした彼に関する評判のなかでもっとも重要なもののひとつは、クルツの死後、彼の従兄弟だという男が訪ねてきてマーロウに告げる彼の性格である。彼は次のように言う。「クルツは信念をもっていた、そうでしょう、彼には信念があった。彼はなんでも、なんでも信じることができたのです。急進党の立派な指導者にもなれたでしょうに。」(“He had faith—don’t you see?—he had the faith. He could get himself to believe anything—anything. He would have been a splendid leader of an extreme party.”)⁴³⁾ ここに述べられているクルツの性格、なんでも信じることができるという彼の性格は、その後の彼の行動を理解する上で重要である。それはマーロウが出張所でふと耳にした言葉、出張所というものはすべて将来のために街道の灯台にならなければならない、商業の中心というだけでなく、すべからく「文明、進歩、啓蒙」(“humanizing, improving, instructing”)の中心にならなければならない、といったクルツの信念の受入れ母体になっていたはずだ。また従兄弟の言う「急進党の立派な指導者にもなれたでしょうに」は、その後に続く「彼はなんというか、その、過激派でした。」(“He was an—an extremist.”)といった過去の事実とあいまって、彼の資質の興味深い一面を物語っている。加うるに、マーロウが直接クルツから聞き出した彼の素姓、母親は混血のイギリス人であり、父親も混血のフランス人であって、クルツ自身は半分ほどイギリスで教育を受けた、という彼の生い立ちは、クルツを一種の象徴的な人物に仕立てあげている点で看過しえない事実である。マーロウの言葉を借りるならば、「全ヨーロッパがクルツという人物を形

成するのに一役買っているのだ。」(All Europe contributed to the making of Kurtz.)⁴⁴⁾ 言ってみれば、クルツは近代ヨーロッパの申し児だということになる。肉体的に言っても、彼の身体の内にはヨーロッパ人の血液が混じり合っていて流れているし、また精神的には近代ヨーロッパが生み出した理念、文明、進歩、啓蒙といった理念を文字通り信じている。シュペングラー風に言うならば、彼はまさしく「ファウスト的靈魂」の産物である。そうした彼が、みずから進んで文明の松明をもち、未開の奥地に赴任してゆく。これから後、クルツが崩壊するまでの過程は、さきに見た『文明の前哨所』におけるように、克明に順を追って述べられている訳ではない。ただマーロウの解釈を交えた語りに頼るだけである。

クルツはコンゴに出発する前に、国際蛮習防止協会(International Society for the Suppression of Savage Culture)に委託されて、将来の指導のための報告書を作成することになっていた。細かい字で17ページもの報告書が後にマーロウの手に渡る。それは大部分クルツがまだ正常な状態にあった時に書かれたもので、極めて雄弁な筆致でものされている。そこには例えばこんな記述が認められる。「我々の意志の働きひとつで我々は善へのちからを實際上無制限に行使することができる、云々」(By the simple exercise of our will we can exert a power for good practically unbounded, etc. etc.)⁴⁵⁾ まさに自己の力量と文明のちからを信じきっているクルツの面目が躍如としている。彼はまだ挫折を知らなかった。結論も雄大そのもので、燃えるような崇高な言葉が熱狂的に記されている。魔術的な言葉の奔流をさえぎる実際的な事柄への言及はなにひとつなされていない。だが、この実際的な事柄への言及が一片たりともないというのが曲者で、ここに「自然」がクルツの気のゆるみに乗じてついている隙がある。実際的な仕事に対して文明人がほとんど無力であることは、すでに『文明の前哨所』のカイエールとカルリエの二人が実証したところである。クルツは文明とか進歩といった理念に陶醉しているうちに、次第に「荒野」("wilderness")に侵食されることになる。それをマーロウは次のように描いている。「荒野が彼を愛撫した。そして、そして、彼は枯れてしまったのだ。それは彼を捕らえ、彼を愛し、彼を抱き、彼の血管に入りこみ、彼の肉を食い尽くし、そして不可思議な悪魔の儀式によって彼の魂を荒野のなかに閉じ込めてしまったのだ。」(it had caressed him, and—lo!—

he had withered; it had taken him, loved him, embraced him, got into his veins, consumed his flesh, and sealed his soul to its own by the inconceivable ceremonies of some devilish initiation.)⁴⁶⁾

ここに述べられている「荒野」とは、当然、原始の自然をさすとともに、それによって呼び覚まされた彼のうちなる自然、狂暴な本能をも意味する。この心のうちなる「荒野」を、フロイトにならって、人間の自我の深層にひそむ破壊的本能だと言うことも可能だろう。だが、コンラッドがしばしば用いている「荒野」という言葉には、心理学的というよりも、むしろ外界との関わりで成立する倫理的な(例えば『ロード・ジム』のなかの有名な「破壊的要素」"destructive element"に見られるような)響きが聞き取れるのであって、自我論によってのみ解釈すると、その言葉のもつ重層性が失われてしまうだろう。その点、批評家のエヴァンズは、ダンテやミルトンの宇宙論的世界観に言及しつつ、神話的アプローチを試みているが、こちらの方がより適切だと思う。⁴⁷⁾

話をクルツの崩壊に戻すと、「荒野」にすっかり侵食されてしまった彼は、すでに見たように土人たちの上に君臨し、近くの村々を手下の一群を率いて略奪するようになる。勿論、目的は象牙である。ロシア人青年の話によると、近隣の酋長たちは毎朝クルツのもとに御機嫌伺いに来るという。彼は飽くことのない所有欲と支配欲のおもむくままに、交易などという生やさしいものではなく、文字通り略奪によって象牙を集め、専制的に支配し、反逆者は即座に処刑する。土人たちにとって彼は不可思議な神のような存在であるから、カリスマ的支配により彼は絶対的な独裁者となる。文明とか進歩といった理念、観念はもはや彼を支えるちからではなくなっている。彼はこうした近代文明の基本的な理念を奉じつつも、その実、空虚なのだ。この「空虚」といったことに言及しつつ、マーロウはクルツには欲望を抑制するなにかが欠けていて、そこを「荒野」につけこまれたのだと次のように言っている。「荒野は早くから彼を見い出して、その幻想的な侵入に対して手きびしい復讐をしていたのだ。荒野は彼自身知らなかった彼、あの非常な孤独と交わるまでは夢想だにしなかったものを彼に囁いていた。そしてその囁きは抗しがたいほど魅惑的だったのだ。私はそう思う。囁きは彼のなかで大きく反響した。なぜならば、彼のこころの奥底は空虚だったからだ。」(the wilderness had found him out early, and had taken on him a terrible vengeance for the fantastic

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

invasion. I think it had whispered to him things about himself which he did not know, things of which he had no conception till he took counsel with this great solitude—and the whisper had proved irresistibly fascinating. It echoed loudly within him because he was hollow at the core)⁴⁸⁾

マーロウがクルツの墮落の原因についてもっとも具体的に、また比較的わかりやすく述べているのは、ほとんどこの部分のみである。他はさらに暗示的に不明瞭に表現されている。したがってこの部分を手掛かりにしてマーロウの解釈をパラフレーズすると、「幻想的な侵入」とは言うまでもなくクルツが文明とか進歩をもたらそうとして闇の奥に赴任したことをさすであろう。そして「あの非常な孤独と交わるまでは」というところは、後に出てくる「荒野にひとりいて、自己の魂を凝視していたばかりに、なんとということだ！彼の魂は狂ってしまったのだ。」（‘Being alone in the wilderness, it had looked within itself, and by Heavens I tell you, it had gone mad.’)⁴⁹⁾の「荒野にひとりいて」といった表現と呼応している。すなわち、この二つの部分を補足的に照合してみると、「彼自身知らなかった彼、あの非常な孤独と交わるまでは夢想だにできなかったもの」とは「自己の魂」のなかにあることになる。だがそうすると、この「自己の魂」のなかにあるものと、「彼のこころの奥底は空虚だった」という表現とはどう結びつくのであろうか。ここに問題がある。事実、ゲラードは、つとに名著のほまれ高いその著『小説家コンラッド』の第一章でこの作品に触れ、こう言っている。「クルツに関して言えば、荒野は『彼のなかで大きく反響した。なぜならば、彼のこころの奥底は空虚だったからだ。』たぶん『闇の奥』のもつ主たる矛盾は、それが悪を活発なちから（クルツとその言語を絶する欲望）として暗示しドラマ化しながら、それを空虚と断じている点にある。」（‘As for Kurtz, the wilderness “echoed loudly within him because he was hollow at the core.” Perhaps the chief contradiction of “Heart of Darkness” is that it suggests and dramatizes evil as an active energy (kurtz and his unspeakable lusts) but defines evil as vacancy.’)⁵⁰⁾つまりゲラードは悪を「自己の魂」のなかにあるものとしながらも「彼のこころの奥底は空虚だった」ではまったく矛盾するではないか、と述べている訳である。ここでゲラードが「自己の魂」のなかにあるものをクルツの「欲望」と見ていること、これは正しい解釈だと思う。や

はり「荒野」がクルツに囁いたのは、彼の魂のなかに潜在的にある所有欲や支配欲を含むもろもろの欲望であり本能である。しかし、はたしてクルツがそうした欲望、本能をもっていながら「こころのなかは空虚だった」では矛盾するであろうか。換言すれば、「こころの奥底」はつねにクルツの欲望や本能によって占められていなければならないであろうか。ゲラードの解釈に私が疑問をもつのはこの点である。ゲラードが矛盾とするところに私は矛盾を見ない。なぜならば、前後関係に注意して読めばマーロウは当時のクルツ、すなわち「荒野」の魅力にいまにも犯されようとしているクルツの状態を述べてるのであって、「こころの奥底は空虚だった」という表現は、クルツがいまだ「自己の魂」のなかに潜在的にある欲望や本能に気付いていない時のことを言っているからである。欲望といい本能といっても、自分でそれに気付かなければそれらは存在しない。存在しないというよりも、当人にとっては存在しないに等しい。クルツの眼がこころの内ではなく、こころの外に向けられていたから、彼は「あの非常な孤独と交わるまでは」自己の欲望に気付かなかったのであり、したがって「彼のこころの奥底は空虚」であって、荒野の囁きが「彼のなかで大きく反響した」のである。ゲラードが指摘するように、さきに引用した部分で重要なのは、「欲望」が「空虚」と背馳することではなく（事実、欲望や本能を実体化することなく、その機能によって把握すれば背馳しない）、むしろどうしてクルツの「こころの奥底は空虚」であったのか、どうして彼は「自己の魂」のなかにある欲望とか本能に気付いていなかったのか、ということだ。

私はさきにクルツは近代文明の基本的理念を奉じつつも、その実、空虚であると言ったが、引用したマーロウの解釈による文脈で言い換えるならば、それは「理念を奉じつつも」ではなく、「理念を奉じているが故に」と訂正されなければならない。彼の荒野への侵入にはあくまでも“fantastic”「幻想的な」とか「途方もない」とか「馬鹿げた」といった形容詞がついているのである。そしてこの「幻想的な侵入」とは前に言ったように、彼が文明とか進歩といった理念を実現しようとして、未開の地に赴任したことを意味している。そうであるならば、彼の「こころの奥底が空虚」であったのも、実は「自己の魂」のなかにある欲望とか本能とはまったく無関係に、文明や進歩といった理念を奉じていたからに他ならないということになる。クルツの崩壊の本質はまさにこの点にある。彼のこころの眼が自己の否定的側面を見据えるこ

となく、理念の熱狂的な言葉の炎に向けられていたからこそ、「彼のこころの奥底が空虚」であったのであり、ひとたび荒野が彼に囁くと、それは「彼のなかで大きく反響」して、潜在的な欲望、本能が胎動を始めたのだ。そして「クルツという男はさまざまな欲望を満たす上で抑制を欠いていた。つまり彼にはなにか欠けるものがあった」(「Mr. Kurtz lacked restraint in the gratification of his various lusts, that there was something wanting in him」⁵¹⁾から、胎動し始めた欲望、本能は彼を根底からつき動かすことになったのだ。この「なにか」というものを再びパラフレーズするために、他のマーロウの言及に対応物をもとめるならば、それは次の部分であろう。「人間のこころのなかにあるものは結局なんだろう。喜びか、恐れか、悲しみか、献身か、勇気か、怒りか、だれが断言しえよう。だが、真実、時という外皮を剥がれた赤裸々な真実というものはあるのだ。愚か者は驚きおののくがよい。真の人間は知っている。そして瞬きひとつせずに見結めることができるのだ。ただ、そうした人間であるためには、すくなくともあの浜辺にたむろする土人たちくらいに人間的でなければならない。みずからの真の生地、生得のちからでもって、その真実に立ち向かわなければならないのだ。主義だって。主義ではだめだ。そんなものは後から獲得されたもので、着物や美しいぼろきれ同様、最初のひと振りでちぎれ飛ぶ屑にすぎない。」(「What was there after all? Joy, fear, sorrow, devotion, valour, rage—who can tell?—but truth—truth stripped of its cloak of time. Let the fool gape and shudder—the man knows and can look on without a wink. But he must at least be as much of a man as these on the shore. He must meet that truth with his own true stuff—with his own inborn strength. Principles? Principles won't do. Acquisitions, clothes, pretty rags—rags that would fly off at the first good shake.」⁵²⁾ だいたい長々と引用したが、要するに、「なにか」とはここでは「みずからの真の生地、生得のちから」といった具合にはなはだあいまいに表現されている。これではなんのこともさっぱりわからない。ただ言えるのは、荒野で自己の魂を見詰めていたクルツは、魂のなかにあった真実、つまり欲望とか本能を見いだして、「その真実に立ち向か」えるような「真の生地、生得のちから」を持ち合わせていなかったために、「真実」に圧倒されてしまったということだ。彼の奉じていた理念、観念などは「最初のひと振りでちぎれ飛ぶ屑にすぎ

な」かったということになる。

これがマーロウの解釈したクルツ崩壊の内的必然性である。クルツの意識がもっぱら燃え上がるような観念の炎に向けられていて、自己のこころの内の「荒野」がその輝きに眩暈され、意識の表面にのぼらず、したがってこころの奥底が空虚であったために、「荒野」の囁きは彼の魂を直撃し、その空虚なこころを内的荒野、つまり支配欲、所有欲、殺戮の陶醉で充満させることになった。さらに彼には、そうした潜在的な本能の無際限な跳梁をくい止めるような「生得のちから」が欠けていた。ここにクルツの「荒野」への頹落の原因があったとマーロウは解釈しているのである。ゲラードが言うようにはマーロウの解釈は自家撞着を起こしているのではなく、むしろゲラードが安易に矛盾としてしまったところにこそ、クルツの崩壊の重要な契機があったのであると言えよう。

これまで見てきたように、クルツの悲劇の誘因は、そのまったくの観念性、空虚として表現される彼の現実感覚の欠如にあったのであるが、同時に彼のもつある意味での偉大さは、彼が自己のもつ観念、理念を信じ込み、その実現のために自己の全存在を賭けることができたという点にある。『文明の前哨所』で見たふたりの白人、カイエールとカルリエは、まったく平凡などこにでもいる小市民として設定されているために、その崩壊も悲劇というよりは、環境のいたずらによる茶番劇にすぎなかったかのような印象を与えるのに対して、このクルツの崩壊には、崇高とも言えるその理想家はだの人間像からして、悲劇と呼ぶにふさわしい傾きがある。この崇高さのよってきたところを小説の構図に即してアナロジカルに追求していけば、文明論的に言えば、結局のところ近代ヨーロッパそのものの持つ崇高さ、偉大さに行き着く。合理的、実証的思考による科学技術がそこで芽生え、発達し、その成果を武器として用いて、伝導者の使命感に支えられつつ世界制覇におもむいた、あの近代のヨーロッパである。市民革命において掲げられ、社会思想に高らかに響きわたった進歩、進化、啓蒙の理想が、いまだ深刻な反省を加えられることもなく追求されていた18、9世紀のヨーロッパである。そうしたヨーロッパがクルツという人物に体现されている。

それでは一体、そのクルツの崩壊はなにを意味しているのだろうか。さきに名前をあげたシュペングラーにならって、ヨーロッパの没落とまでは言わないものの、その陰りを見て取ることは容易であろう。近代ヨーロッパ

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

の犠牲の山羊的役割をになわされているクルツを特徴づけるのはその観念性にあった。作者はそれを際立たせるために、まずは現地のアフリカ人たちをクルツと対比的に描いている。彼らはまわりの環境から遊離することなく、「岸に寄せくる波のように自然」な生活を実に悠然と送っていた。アフリカではなく、アジアを舞台としたコンラッドの作品、例えば『オールメイヤーの阿房宮』『ロード・ジム』『勝利』などに登場する東洋人たちも、大体において、植物的ともいうべき根強い生命力をもった人間として描かれていて、多かれ少なかれ「幻想」とりつかれて闖入してきた白人たちの姿を、悲喜劇的に浮き上がらせる役割をはたしている。この作品での黒人たちもその点ではまったく同じだ。今世紀の生態学的文化史観や文化的相対主義に通ずる視点がここには用意されているのである。もうひとつクルツの観念性を異常に引き立たせている要素はその多弁ということである。濃密な自然、そのかたわらに打ち捨ててある廃物のアニミスティックな描写、こうした「もの」そのものの実在を生々しく喚起する表現が作品に充満しているだけに、クルツの特徴とされている観念的なことばの羅列、雄弁がひどく空々しく響いてくるのである。コンラッドは後年『西洋人の眼のもとに』の最初の部分で、英国人語学教師に、「ことばというものは、周知のように、実在の最大の敵です」(‘Words, as is well known, are the great foes of reality.’)⁵³⁾と言わしめているが、ことばと実在との遊離、懸隔にするどい視線を向けてきた作者であるから、ここでもクルツの雄弁を、「もの」や現実との対応関係においてではなく、もっぱら遊離といった観点から強調していることは疑いを入れないと思う。マーロウによってしばしば語られたクルツの異常な雄弁は、「もの」との緊密な対応を失った空疎なことばの奔流にすぎなかったのである。

作者による以上の道具立てを考慮に入れば、クルツの崩壊は、近代ヨーロッパ文明に抜きがたく存在する観念性の落とし穴、その栄光にまつわる悲劇、「ファウスト的靈魂」の否定的側面を象徴し、メッセージとしては、人間のもつ破壊的要素、人間存在そのものにまつわる身体性や他者性、悪、自然を無視していたずらに観念（幻想）を追求すれば、早晚、人間は、内なる「自然」と外なる「自然」によって手酷い復讐を受けることになるだろう、ということである。

(V) エピローグ

1925年、つまりコンラッドが死んだ翌年であるが、詩人の T. S. エリオットは『うつろな人々』(“The Hollow Men”)を発表した。この詩のエピグラムには、よく知られているように、‘Mistah Kurtz—he dead.’ (「クルツさんが、死にしまった。」) という『闇の奥』からの抜粋が用いられている。クルツの死をもって「うつろな人々」の無気力で荒廃した人間像の描写は幕をひらいているのである。なぜエリオットがクルツの死をもって現代人の心象風景を象徴したのかは、比較的容易に理解できるし、評者の意見もだいたい一致している。ヨーロッパ文明の生み出した価値の普遍性を信じ、その強い信念をもって短い人生を熾烈に生きたクルツ、そのクルツはもういないし、現代の「うつろな人々」にはそうした生き方は過去のものであってもうできない、自己を燃焼させる対象が見つからないままにただ孤疑逡巡するだけである、といったところである。クルツが体现する19世紀のヨーロッパは、文明、進歩、啓蒙を旗印にした覇権主義の時代であり、ふたたびシュペングラーのことばを用いれば、文明の段階にある「ファウスト的靈魂」が最高潮に達した時代である。他方、「うつろな人々」の生きる世界は、覇権主義の帰結である第一次世界大戦という未曾有の悲劇を体験し、「ファウスト的靈魂」が頓挫した後の不信と懐疑の時代である。一方はある意味での英雄の時代であり、他方は明らかに現代につながる大衆の時代である。

それでは一体、語り手であるマーロウは、どのように位置づけたらよいであろうか。上記ふたつの時代のはざまにあって、彼はクルツの崩壊を見届け、市民社会に対する疎外感を払拭しきれないまま、陸上での定住生活を拒んで船乗りを続けている。そのマーロウは、小説の最後の場面では瞑想する仏像のような姿で、テムズ川をいどる世紀末の夕暮れに見入っていた。その視線の奥にあるものはなんだろうか。私には作者コンラッドの次のことばが思い浮かぶ。「諦念、神秘的でも超然としているのでもなく、慈愛に満ちて、油断なく見張っている諦念、これこそは決して偽ることのない我々の唯一の感情である。」(‘Resignation, not mystic, not detached, but resignation openeyed, conscious, and informed by love, is the only one of our feelings for which it is impossible to become a sham.’)⁵⁴⁾ 過去の規範が崩れ、いまだ新しい規範が形をなさない世紀末にあって、マー

ロウの眼は諦念をたたえつつ近代ヨーロッパの黄昏にこそがれていたに違いない。

注

- 1) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography*, 1967, New York: McGraw-Hill Book Company, pp. 106-107.
- 2) "When I grow up I shall go there." Robert Kimbrough, ed., *Heart of Darkness*, A Norton Critical Edition (Third Edition), 1988, New York: W. W. Norton & Company, p. 148. 以後、ノートン版と表記。
- 3) Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist*, 1967, New York: Atheneum, p. 33.
- 4) ノートン版, pp. 159-64.
- 5) Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography*, p. 117.
- 6) 同上, pp. 112-13.
- 7) "It may be said that Africa killed Conrad the sailor and strengthened Conrad the novelist." ノートン版, p. 195.
- 8) "They were two perfectly insignificant and incapable individuals, whose existence is only rendered possible through the high organization of civilized crowds." J. Conrad, *An Outpost of Progress*, The Portable Conrad, 1968, New York: The Viking Press, p. 462.
- 9) "To grapple effectually with even purely material problems requires more serenity of mind and more lofty courage than people generally imagine. No two beings could have been more unfitted for such a struggle. Society, not from any tenderness, but because of its strange needs, had taken care of those two men, forbidding them all independent thought, all initiative, all departure from routine; and forbidding it under pain of death. They could only live on condition of being machines. And now, released from the fostering care of men with pens behind the ears, or of men with gold lace on the sleeves, they were like those lifelong prisoners who, liberated after many years, do not know what use to make of their freedom. They did not know what use to make of their faculties, being both, through want of practice, incapable of independent thought." 同上, pp. 463-64.
- 10) 同上, p. 465.
- 11) 同上, p. 469.
- 12) "They both, for the first time, became aware that they lived in conditions where the unusual may be dangerous, and that there was no power on earth outside of themselves to stand between them and the unusual." 同上, pp. 470-71.
- 13) "The images of home; the memory of people like them, of men that thought and felt as they used to think and feel, receded into distances made indistinct by the glare of unclouded sunshine. And out of the great silence of the surrounding wilderness, its very hopelessness and savagery seemed to approach them nearer, to draw them gently, to look upon them, to envelop them with a solicitude irresistible, familiar, and disgusting." 同上, pp. 479-480.
- 14) "Progress was calling to Kayerts from the river. Progress and civilization and all the virtues. Society was calling to its accomplished child to come, to be taken care of, to be instructed, to be judged, to be condemned; it called him to return to that rubbish heap from which he had wandered away, so that justice could be done." 同上, pp. 487-88.
- 15) J. Conrad, *Under Western Eyes*, London: J. M. Dent and Sons Ltd., p. 10.
- 16) "Everybody must walk in the light of his own gospel..... No man's light is good to any of his fellows. That's my view of life—a view that rejects all formulas, dogmas and principles of other people's making. These are a web of illusions. We are too varied. Another man's truth is only a dismal lie to me."
- 17) The Portable Conrad, pp. 477.
- 18) 同上, pp. 461-62.
- 19) 同上, pp. 465.
- 20) 同上, pp. 479.
- 21) Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, 1960, Chicago and London: Phoenix Books, p. 152.
- 22) サルトル著 (小林正訳) 『シチュアションI』 人文書院, 1965年, p. 39.
- 23) "the story is primarily concerned with the effect of the country and Kurtz on Marlow." Douglas Hewitt, *Heart of Darkness*, A Norton Critical Edition (First Edition), 1963.
- 24) ノートン版, p. 30.
- 25) 同上, p. 11.
- 26) Robert O. Evans, 'Conrad's Underground,' A Norton Critical Edition (First Edition).
- 27) ノートン版, p. 17.
- 28) 同上.
- 29) 同上, p. 20.
- 30) 同上, p. 27.
- 31) 同上, p. 28.
- 32) 同上.

ジョゼフ・コンラッドのアフリカ（上原慎吾）

- | | |
|--------------------|--|
| 33) 同上, p. 31. | 45) 同上. |
| 34) 同上, p. 37. | 46) 同上, p. 49. |
| 35) 同上, pp. 37-38. | 47) Robert O. Evans, 'Conrad's Underground,' A
Norton Critical Edition (First Edition). |
| 36) 同上, p. 36. | 48) ノートン版, pp. 57-58. |
| 37) 同上, p. 39. | 49) 同上, p. 65. |
| 38) 同上, p. 59. | 50) Albert J. Guerard, <i>Conrad the Novelist</i> , p. 37. |
| 39) 同上, p. 70. | 51) ノートン版, p. 57. |
| 40) 同上, p. 76. | 52) 同上, p. 38. |
| 41) 同上. | 53) J. Conrad, <i>Under Western Eyes</i> , p. 3. |
| 42) 同上, p. 10. | 54) J. Conrad, <i>A Personal Record</i> . |
| 43) 同上, p. 71. | |
| 44) 同上, p. 50. | |